SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# 英語科授業案：教科で育みたい人間像「世界の人々とつながる人」



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2023-03-17<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 池田, 卓弥, Coughlin, Matthew<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10297/00029507 |

# 英　語　科　授　業　案

## 教科で育みたい人間像　「世界の人々とつながる人」

授業者　池　田　卓　弥
Matthew Coughlin

**1　日　時**　令和４年10月14日（金）　第１時　10：20〜11：10
**2　学　級**　３年Ｂ組　（３年Ｂ組教室）
**3　題材名**　**What's Going on in the World Now?　―世界の今をSDGsから考える―**

**4　本題材で願う学び**

SDGsを通して、世界を自分ごととしてとらえた子どもたちが、英語を用いて「世界の今」と「自分のあり方」を考え、発信しようとする中で、英語を用いたコミュニケーションの価値を見いだす。

（学習指導要領との関連：⑴聞くこと⑵読むこと⑶話すこと［やり取り］⑸書くこと　ウ）

**5　題材観**

**⑴　これまでの子どもたちの学び**

本校英語科の「互いにわかり合おうとしながら英語を用いてコミュニケーションを繰り返せるような題材選定を大切にしたい。感情を揺さぶる題材は、伝えたい・知りたいという子どもたちのコミュニケーション意欲をかき立てるだろう」（令和４年度英語科教科の主張より）という思いをもとに、子どもたちはこれまでの言語活動の中で様々な題材にふれてきた。その中で、子どもたちが高い興味を示した題材は、異文化での人々の生活様式や、実際の出来事を扱ったものである。

例えば、１年時の“Make Your Dream School”の題材において、キッズ外務省のホームページを参考に、ジャマイカ、フランス、パプアニューギニア、エチオピア、それぞれの学校のようすを子どもたちに紹介した。子どもたちは登校時間や授業内容、給食や部活動などの違いに驚き、「ジャマイカの宗教の時間って何を習うんだろう」「日本もフランスみたいにカフェテリアがあるといいよね」「パプアニューギニアも学校で携帯は使えないんだ」「エチオピアの午前中５時間授業は大変そうだ」など様々な感想をもった。各国の学校生活にふれた子どもたちはその後、自らが考える「夢の学校」について英作文を書き、互いに紹介し合う活動を行った。子どもたちは日本と海外における学校のシステムが異なることを知り、「他の国の学校についても調べてみたい」「宗教の授業について詳しく知りたい」など、異文化への興味や関心を高めた。

２年時の“Enjoy Shopping”では、ニューヨークのピザレストランで、現地の店員が日本から来た旅行者を接客する場面を想定し、言語活動を行った。子どもたちは最初“May I help you?”や“Pizza and cola, please.”など、必要最低限の情報を交換するやりとりが多かった。そこで、実際のアメリカのレストランで現地の店員と日本人がやりとりするようすを子どもたちに動画で紹介した。店員が“Hi, how are you today?”と話しかけたり、客が“What do you recommend?”とおすすめを聞いたりする姿に、子どもたちは「アメリカのレストランの店員はこんなにフレンドリーなんだ」「アメリカのレストランに行ってみたい」という思いを抱いた。またALTが「アメリカにはチップがある。客は店員に飲食代の15％程度のチップを払う。もし、サービスがよかったと感じたら20％程度払うときもある」とチップのシステムを紹介した。その後の言語活動において、子どもたちは店員と客が交わす必要最低限のやりとりだけではなく、“Where are you from?”“I'm from Shizuoka. It's near Mt. Fuji.”“I know Mt. Fuji! I want to go there!”という対話を付け足してみたり、会計の際にチップを含めた代金を支払おうとしたりするなど、子どもたちは英語が実際に使用される場面でのコミュニケーションに近づけようと意欲的に言語活動に挑んだ。子どもたちは、国が変わることで同じシチュエーションでの対話でも、コミュニケーションの仕方が変わることに気づき、そのよさを積極的に取り入れることで、自分たちのコミュニケーションをよりよいものにしようとする姿が見られた。

３年時の“Read an Article”では、2022年のアカデミー賞授賞式において、コメディアンのChris Rockが、俳優Will Smithの妻、Jada Smithの容姿にかかわるjokeに腹をたて、壇上でChrisを殴打した事件の記事や、Will Smithが事件後にInstagramに投稿したメッセージを読み、“Who's Bad?”をテーマにグループや学級全体で意見交換を行った。意見交換に向けた調べ学習の中で、子どもたちは日本人とアメリカ人の間におけるviolenceに対する考え方や、日本とアメリカのjokeに対するとらえ方の違いを知り、その違いに驚いた。子

どもたちは、異なる文化をもつ人たちと自分たちとの間にある価値観の違いにふれ、互いの文化や価値観を知り、それを受け入れることが、異文化をもつ人たちとかかわるときに大切だということを学んだ。

これまでの学びを通して、子どもたちは世界のリアルにふれることで、自分たちの生活や文化のよさを再確認したり、異なる文化をもつ人たちの考え方や思いを想像したりすることができた。それぞれの題材で、よりよいコミュニケーションについて考えるとともに、子どもたちと世界の人々との距離が少しずつ縮まってきたことを実感する。しかし、子どもたちはそれぞれの題材について、リアルな出来事であってもあくまでも遠い世界の出来事としてとらえており、自分ごととして世界とかかわっているとは言い難い。子どもたちが「自分も世界の一員」であることを自覚し、自分ごととして世界と向き合うときに、より一層国際言語としての英語の必要感をもつことができるのではないだろうか。

### ⑵　SDGsとは

#### ①キャッチコピーとしてのSDGsとその原文

SDGsとは“Sustainable Development Goals”の略であり、「持続可能な開発目標」と訳される。SDGsという言葉は現在、多くの人が知っている言葉であり、私たちの生活の中にも広く浸透している。日常生活の中で、17個の目標がキャッチコピーと共に図式化されたもの（**図１**）を見たことがある人も多いだろう。本校でも保健室前に17個の目標が入ったポスターが掲示されている（**図２**）。

**図１　SDGs17個の目標**

SDGs Clubより　https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/about/

**図２　本校保健室前に貼られたポスター**

図式化された表の１番には「貧困をなくそう」（No Poverty）というフレーズが掲げられている。これは一見して途上国の問題に思えるが、原文を見ると「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」（End poverty in all its forms everywhere）とある。目標の１番は「貧困をなくそう」という言葉から連想される、途上国での絶対的貧困についての目標だけではなく、「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困」、例えば、先進国と言われる日本での相対的貧困についても含まれた目標であることが見えてくる。

このように、私たちが日常生活の中で見たり聞いたりするSDGsは、キャッチコピー化されたものがほとんどである。その原文を見ると、それぞれの目標には私たちが目にする言葉からイメージすることよりも、詳細で幅広い目標が設定されていることがわかる。子どもたちがSDGsにふれたときに、SDGsが世界中の様々な出来事を多面的にとらえていることを知り、SDGsを通して世界を見ることで、子どもたちの世界の見え方は大きく広がるだろう。

#### ②SDGsの本質を知る

SDGsが採択される以前、2000年に開催された国連ミレニアムサミットにおいて、「2015年までに国際社会が開発分野で達成すべき共通の目標」として、MDGs（Millennium Development Goals、ミレニアム開発目標）が採択された（**図３**）。その中では極度の貧困と飢餓の撲滅など８つの目標が掲げられた。MDGsは貧困や飢餓、感染症対策の分野で一定の成果を残したものの、教育、母子保護、衛生といった分野や、地域における達成率の格差などの課題を残した。

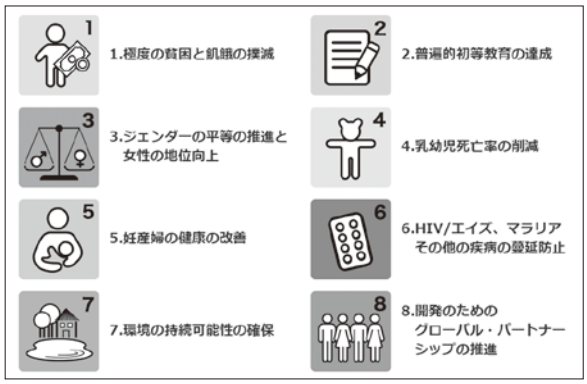


**図３　MDGs８個の目標**

ユニセフ公式サイトより　https://www.unicef.or.jp/mdgs/

SDGsは2015年の国連総会において、MDGsの課題を引き継ぐ形で採択された「2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標」のことである。その理念は「誰一人取り残さない」（No one will be left behind）とされている。

その二つの違いは何だろうか。まず、MDGsが途上国の開発問題を対象としたものであり、先進国はそれを援助する側という位置づけであったことと、SDGsが途上国の開発問題にとどまらず、経済、社会、環境の３つの側面に対応し、先進国にも共通の課題として設定されていることが挙げられる。

また、MDGsでは８つの目標と21のターゲット、60の指標が掲げられたことに対し、SDGsでは、17個の目標、169のターゲット、232の指標が掲げられている。SDGsはMDGsと比較して、幅広い分野での目標が細分化されており、“No one will be left behind” を理念とする包摂性を大きな特徴としていることもMDGsとの違いである。

さらに、国際機関や各国政府が主導する「縦割り型」の目標ではなく、民間企業や市民社会も参画する「全員参加型」の目標であることもSDGsの大きな特徴である。つまり、SDGsは世界中の一人一人が、自らの意思で参画できる目標なのである。

キャッチコピー化されたSDGsだけでは、このようなSDGsの本質的な内容を知ることはできない。SDGsの本質を知った子どもたちは「自分もすでにSDGsに参加しているんだ」「自分たちでも世界に対して何かできることがあるのではないか」「自分たちも世界に向けて何かをしなくては」などという思いを抱き、世界のリアルを自分ごととしてとらえることができるだろう。

### ⑶　SDGsを英語科の題材として扱うことの価値

#### ①英語のもつ、世界中の人と人とをつなぐ力を実感する

SDGsは国連で採択された世界共通の用語である。私たちは世界中の人たちと、SDGsをよりどころに、世界について語り合うことができるのだ。そのときに、最も多くの人に自分の考えや思いを伝えることを可能にする共通言語が英語であることは言うまでもない。

子どもたちは本題材の最初に、SDGsにかかわる活動を行っている世界中の子どもたちがメッセージを伝える動画を視聴する。動画内で、タンザニアの少女がアメリカ大統領に「きれいな水を手に入れるための支援をしてほしい」と手紙を書き、それを成功させたことを、語り手の少女が英語で紹介する。その後、タンザニアの少女が世界中の若者に思いを伝えるのだが、その部分は英語ではない。

子どもたちは「タンザニアの少女は何て言っているんだろう」と疑問に思うだろう。再度、字幕のついた動画を見て、メッセージの内容を理解したとき、子どもたちは彼女の思いを受け取ると同時に「あの子が英語で話していたらメッセージを直接理解できたかもしれない」という思いを抱き、英語のもつ発信力の強さ、大きさに改めて気づくことができるだろう。

語り手の少女は様々な活動を紹介した後に、視聴者である世界中の子どもたちに “What could you do?” と英語で語りかける。彼女のメッセージを受け取った子どもたちは頭の中で世界に思いを巡らせ、自分にできそうなことを考えるだろう。そのときが、世界と日本の教室にいる子どもたちが英語を通してつながる瞬間である。英語でのメッセージを受け止めることで、世界と自分がつながることを子どもたちは体験できるだろう。

SDGsを通して世界について考えると、様々な国や地域で多様な問題が起こっていることに気づく。それらを解決するためには、自分の思いを共有できる人たちと出会い、互いを理解しながら、助け合うことが大切であることも見えてくる。しかし、思いを共有できる人が、日本語が通じる人とは限らないだろう。日本語が通じない、他の国や地域に住む人と協働する必要があるかもしれない。そのようなときに用いられるのは、やはり世界の共通言語である英語であろう。世界共通の目標であるSDGsを達成するために、英語は必要不可欠なツールだということを、子どもたちはSDGsを通して世界を見ることで実感できるだろう。

題材の終盤で、子どもたちは「世界の今」と「自分のあり方」を考え「行動宣言」にまとめる。題材を通して子どもたちは、世界について語るときの英語の必然性を実感しているだろう。そして、「世界の今」と「自分のあり方」について、自分の思いや考えを発信することに「自分なりの英語で表現したい」という意欲をもって取り組むだろう。それが仲間に届いたとき、子どもたちは大きな達成感や充実感を味わうことができるだろう。

#### ②世界の見え方が変わり、世界とのつながり方も変わる

世界で起きていることを、SDGsの視点からとらえ直すことは、子どもたちの世界の見え方を変えたり、子どもたちに様々な視点を与えたりするだろう。例えば、ロシアによるウクライナへの侵攻は、近年の大きな国際的な出来事である。世界中の多くの人が、この問題に関心をもち、議論がなされている。SDGsを通してこの問題を見ると、それまでに気づくことができなかった様々な視点で、問題をとらえられることに気づき、驚くだろう。「16　平和と公正をすべての人に」はもちろん、戦禍の子どもたちの生活に目を向ければ「４　質の高い教育をみんなに」もかかわる。また、発電所が占拠されたことから「７　エネルギーをみんな

に　そしてクリーンに」とつなげることもできる。SDGsを通して世界を見ることは、子どもたちに様々な視点を与えるだろう。

SDGsについて調べ、共有する場面で、子どもたちは“No one will be left behind”の理念や、世界中の人たちが参画し達成するべき「全員参加型」の国際目標であることを、題材を通して実感しながら学ぶことで、子どもたちは「SDGsには自分たちが含まれていること」に気づき、世界のことをより身近に感じられるだろう。

さらに、SDGsの達成期限である2030年の自分を想像した子どもたちは、社会人として一歩を踏み出す年齢になった自分を思い浮かべ、より未来を想像しながら「世界の今」を自分ごととしてとらえ始めるだろう。

### ⑷　本題材で願う子どもの姿

本題材で願う子どもたちの姿は二つある。一つ目は**「英語のもつ、世界中の人と人とをつなぐ力を実感し、自分の考えや思いを伝えようとする姿」**である。

子どもたちが知らない誰かに英語で質問されたとき、その英語を理解できれば、自然と自分なりの考えや答えを伝えようとするだろう。子どもたちが異文化をもつ世界中の人々と語り合う自分の姿を思い浮かべるとき、そこで用いられている言語は英語だろう。子どもたちが世界とつながろうとするとき、英語は欠かせないツールとしてそこに存在する。

前述したSDGsについての動画を視聴した後に子どもたちは、英語のもつ世界中の人と人とをつなぐ力を強く実感するだろう。その思いを大切にしながら、自分の考えや思いを自分自身の英語で発信しようとする姿に期待する。

二つ目は**「SDGsを通して世界を見ることで、子どもたちが世界を自分ごととしてとらえようとする姿」**である。

漠然とした大きな「世界」も、SDGsを用いると、その入り口が見えてくる。世界で起きていることをSDGsの視点から見ることで、普段目にしたり、耳にしたりするニュースや世界情勢の背景には様々な事柄が関係していることを実感してほしい。そのような実感を得ることで、自分とは関係のないように思えていた「世界の出来事」と「自分」とをつなぐ糸口を見つけ、「世界の今」と「自分のあり方」の関係について、自分ごととしてとらえ、発信することに価値を見いだすことを期待する。

１、２年生の頃から、子どもたちは世界の様々な文化や出来事、時事問題についてふれながら、英語でのコミュニケーションを繰り返してきた。３年生になった今、自分の思いや考えを英語で表現できる幅は大きく広がり、相手意識をもちながらコミュニケーションを図ろうとする姿が多く見受けられるようになった。

様々な題材の中で世界のリアルを感じながら、よりよいコミュニケーションについて考え、学びを重ねてきた子どもたちは、自分ごととして世界に目を向け、自分の言葉で世界とつながろうとするだろう。そのような思いをもった子どもたちが、未知の世界や文化、人々との出会いを肯定的に受け止め、他者とかかわりながら自分の世界を広げることができるような人になることを強く願っている。

## ６　題材構想（全12時間）

⑴　“What’s Going on” in the world now?（１時間）
⑵　Do you know SDGs? Dive deeper into SDGs（２時間）
⑶　“What could you do?” Make your declaration for SDGs（４時間）
⑷　Read “Our Future”（３時間）
⑸　Talk about “Our Future”（２時間）

## ７　題材構想にあたって

本題材で願う子どもの姿を生み出すためには、子どもたちのSDGsへの見方が広がり、より自分ごととしてSDGsをとらえ直すことが大切となる。そのためにも、子どもたちがSDGsの本質をとらえ、SDGsがもつ“No one will be left behind”の理念に共感し、「自分たちもSDGsに参画できるんだ」という実感をもつことが欠かせない。そのために子どもたちに、よりリアルな素材やより身近に感じられる活動例を通してSDGsに出会わせたい。また、子どもたちは、SDGsの本質をとらえ、「世界」という大きな枠組みの中で自分にできることを考え始めることで、自分も世界の一員であることを自覚し、英語で自分の考えや思いを伝えることにさらなる価値を見いだすだろう。そうすることで、子どもたちが世界の共通言語である英語を学ぶ価値を実感し、自分の言葉で世界の人々とつながろうとすることを期待する。以下は題材を通した子どもたちの活

動例である。

「(1) “What’s going on” in the world now?」では「世界の今」とSDGsを関連づけて考えることで、子どもたちに世界のとらえ方が大きく変わることを実感させたい。「世界の今」を問うと、多くの子どもたちがロシアによるウクライナ侵攻を挙げるだろう。そこで、子どもたちが関心をもっているこの出来事をSDGsの視点から見てみようと提案する。この一つの出来事をSDGsの視点から見直す活動を通して、子どもたちは戦禍の人たちの生活を想像し、一つの出来事には様々な事柄がかかわっていることに気づくだろう。SDGsを通して世界で起きていることを見直してみると、世界の見え方が変わったり、より解決すべき課題や問題点が見えてきたりすることを実感した子どもたちは、今までもっていたSDGsに対するイメージを見直し、「世界で起きている出来事を多面的に見ることができるSDGsってすごい」「もっとSDGsについて調べてみたい」という思いを高めていくだろう。

そこで「(2) Do you know SDGs? Dive deeper into SDGs」では、子どもたちがSDGsについて調べたり、その宣言や前文にふれたりすることで、本質的な特徴にせまっていくことを期待する。キャッチコピーとして名前は知っていたSDGsをより深く知ることは、子どもたちがSDGsの理念に共感したり、より身近なものとして感じたりすることにつながるだろう。そうすることで初めて、子どもたちはSDGsを単なるキャッチコピーではなく、自分ごととしてとらえ始め、SDGsが全員参加型の目標であることの意義を本当に理解することができるだろう。

子どもたちがSDGsの理念に共感し始めたところで、授業者は、SDGsにかかわる活動を行っている世界中の子どもたちがメッセージを伝える動画を提示する。この動画は、語り手の少女が“What could you do?”と視聴者に問いかけて終わる。子どもたちは頭の中で、彼女の質問に対する答えを見つけようとするだろう。そのときこそが、子どもたちが世界と英語でつながった瞬間だと言える。子どもたちは、英語には世界中の人と人とをつなげる力があることを実感するはずである。

「(3) “What could you do?” Make your declaration for SDGs」では、語り手の少女に問われた“What could you do?”に対する返答として、子どもたちが自分なりの「行動宣言」を作成する。まず、“What could you do?”をテーマに、４人組でSmall Talkを行う。そこで、自分なりの「行動宣言」のアイディアをもったり、様々なアイディアにふれたりする子どもたちの姿を期待する。Small Talkで語られた内容をもとに、子どもたちは思いを膨らめながら、自分自身の「行動宣言」を書き始めるだろう。その際に、行動宣言、宣言の設定理由となる「世界の今」、自分の具体的な行動、2030年の世界の姿を内容に含むことを全体で確認したい。また、全員分の行動宣言を集めた“Our Future”というタイトルの冊子を作成することも子どもたちに伝えることで、読み手を意識して内容や表現に工夫を凝らしていく姿につなげたい。子どもたちには、SDGsを通して「世界の今」を様々な視点でとらえることや、自分ごととして「行動宣言」の作成に挑むことを大切にしてほしい。自分なりの「行動宣言」が完成したとき、子どもたちは達成感や充実感を味わい、それを伝えたい気持ちになるだろう。また、仲間の「行動宣言」やそれに込めた思いが気になり、早く読んでみたくなるだろう。

「(4) Read “Our Future”」では、子どもたちは仲間の「行動宣言」を読みとることで、仲間の考えや思いを知り、共感したり、疑問を感じたりするだろう。自分と仲間の考えや思いを比較することで、さらに自分の考えや思いを深めたり、広げたりしてほしい。学級全員分の思いがつまった冊子を、子どもたちは一生懸命「わかろう」としながら読み進めていく。Readingの利点は、一人一人が自分のペースで読み進められることや、何度も読み返せることなどにより、内容を正しく理解しやすいことが挙げられる。Listeningよりも発信者の考えや思いが伝わりやすいと言えるだろう。

子どもたちは、仲間の考えに共感したり、疑問に感じたり、自分では思いつかなかったアイディアに出会えたりするなど、仲間の考えを知ると同時に、「もっと仲間の思いを知りたい」と考えるだろう。そこで「(5) Talk about “Our Future”」では、仲間と“Our Future”について語り合う時間を設定する。読後の感想を自分なりにまとめ、グループ内で意見交換を行う。仲間と“Our Future”について語ることで、新しい視点に出会い、さらに自分の考えや思いを深めることができるだろう。最後は全員で意見交換を行い題材を閉じる。

語り合いを終えた後の子どもたちの心の中には、どのような2030年が思い描かれているだろうか。そこに行き着くために、子どもたちはどのようなことを考え、どのような行動をしていくのだろうか。よりよい2030年に向けて、子どもたちが何か一つでも行動を起こしたとき、その行動が英語科で育みたい人間像である「世界につながる人」への第一歩となるだろう。

参考文献：一般社団法人Think the Earth（2018）『未来を変える目標　SDGsアイデアブック』.
新井美希（2016）「近年の国際開発目標をめぐる動向－MDGsから2030アジェンダへ」『調査と情報』第898号.
参考資料：外務省「Japan SDGs Action Platform持続可能な開発のための2030アジェンダ」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf（英語本文）
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000101401.pdf（仮訳）
キッズ外務省『世界の学校を見てみよう！』 https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/
バイリンガール英会話『ハワイの人気スポットでリアルなレストラン会話』
https://www.bing.com/videos/search?q=youtube+chika+English+hawaii+restaurant&docid=608050847057384642&mid=4125BD60A1AB7391DE094125BD60A1AB7391DE09&view=detail&FORM=VIRE
SDGs Club　https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/
United Nation Sustainable Development　https://www.un.org/sustainabledevelopment/
World’s Largest Lesson - Just a Kid | Global Goals　https://www.youtube.com/watch?v=Sl-mjCLInm0